The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大量生産の時代における手作りのデザインとジェンダー : 手作りインテリアの意味をめぐる考察
Author(s)	神野, 由紀
Citation	デザイン理論. 2018, 72, p. 116-117
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70572
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大量生産の時代における手作りのデザインとジェンダー
── 手作りインテリアの意味をめぐる考察 ──

神野由紀　関東学院大学

はじめに

本発表では，大量生産の時代にあって，あえて手作りをする意味とその背景を明らかにするため，女性の手作りの社会文化的考察を行った。戦後日本において女性の手芸趣味が広まっていく一方，大工仕事的な手作りも推奨されていた。女性の手作りへの意識がどのように変化していったのか，また手作りのジェンダー化はどのようにおこっていったのか，手作りを始めたばかりの若い女性を読者層とする『ジュニアそれいゆ』（ひまわり社，1954年～1960年）『私の部屋』（婦人生活社，1972年～1990年）の記事内容から，を明らかにした。

1　『ジュニアそれいゆ』における手作り

1-1　『ジュニアそれいゆ』の手作りインテリア

中原淳一による『ジュニアそれいゆ』は，刊行期間は短いが1950年代の少女達に与えた影響は大きい。その記事は小説などの読み物，芸能人情報，生活規範などが多いが，同時に手作りに関する記事も非常に多いことが特徴である。（全1874記事のうち，読物：480，芸能人：178，生活規範：260，手作り：430）そして手作り記事の中でも目立ったのが，インテリアに関する内容であった。このインテリアの記事を詳細に検討した結果，次のような３つの傾向が多く見られることがわかった。

１つ目が，アップリケを中心とした，布を使ったインテリアである。中原自身，このアップリケを誰にでも簡単にできる親しみやすさから推奨しており，同誌では中原を始め，内藤ルネ，松島啓介など，男性によるデフォルメされたかわいいアップリケの作品が毎号のように紹介され，その多くが座布団カバーやクッション，カーテンといったインテリアに応用された。

２つ目が，鋸や金槌を用いた工作記事の多さである。本棚から本格的な犬小屋まで，工具を用いた大工仕事が手芸と同じように推奨されている。手芸と工作といった，少し異なる手作りが特に問題なく同時に紹介されているのである。まだ保守的な良妻賢母主義も残存している中で，こうした工作が女性たちに受け入れられている事実は，注目すべきであるといえる。『ジュニアそれいゆ』で工作記事も人気であったことは，臨時増刊『アップリケと工作』『楽しい日曜工作』などが刊行されていることからもわかる。

３つ目の特徴が，壁を飾るためのディスプレイの方法が頻繁に紹介されているという点である。廃品や手作りのものを組み合わせたディスプレイは，床の間の顕示的な調度品とは異なり，女性の自分らしさを表現するものとなっている。住環境の変化により，壁面をどう飾るかは女性たちの大きな関心となり，額の中に飾る絵やコラージュ，アップリケまでも自らデザインしていくことで，アートと手芸の混在した芸術行為としての手芸が女性たちに受け容れられていった。

1-2　中原淳一と片山龍二

『ジュニアそれいゆ』の書き手のほとんどは男性であったが，女性的な手芸を推奨する男性が多く見られた。その中で片山龍二は主に工作記事を担当し，少女達を男性の日曜大工仕事に向かわせるような，新しい手作りの

傾向を生み出した。中原が女性の手芸を「女らしさ」を表すものと捉えていたのに対して，片山は時代に先駆けてDIYの語を用いて，本格的な大工作業を女性に勧めている。片山にはそれほどDIYの思想性は認められなかったが，彼のジェンダーを越境したもの作りは，その後の女性と手作りの方向を予見したともいえる。

2　『ジュニアそれいゆ』から『私の部屋』へ

2-1　若者のインテリアへの関心の高まり

『ジュニアそれいゆ』でのインテリアへの関心は，1972年創刊の『私の部屋』に継承された。この２誌は，記事内容や寄稿者など，共通する部分が多い。雑誌『私の部屋』の創刊の背景には，進学や就職で一人暮らしを始める女性や，自宅で個室を持つ若者の増加が，インテリアへの関心を高めたことにある。

2-2　『私の部屋』における手作り記事

同誌の悉皆調査によると，1972年～1977年頃の記事では，DIYの名のもとに手芸も大工仕事も一緒に扱われていたことがわかる。関連記事にはDIYマークが付けられ，鎌田豊成の工作記事の連載記事が人気を博した。鎌田の工作記事には，片山と同様にそれほどの思想性はみられなかったが，同時代の『私の部屋』では，対抗文化の影響を受け，工業社会批判から自然回帰を目指すヒッピーカルチャーの傾向が色濃くみられた。

第２次大戦後の復興を自分たちで行うことからロンドンで始まったDIY運動は，ヒッピーカルチャーと結びつき，工業化が行き過ぎた中で，自然の中での手作りの生活を男女の別なく推奨していく。しかしその後，女性たちは様々なDIYの中でも，馴染みの良い手芸に関心を向けていく。そうした中，1978年頃から同誌で大きな役割を果たしたのが，パッチワークキルトであった。

同誌では，1977～78年頃から工作記に代わりパッチワークキルトの記事が主流となっていく。この頃，雑誌ではアーリーアメリカンの住まいや，そこでの伝統的な暮らし方に関する記事が増え，カントリースタイルの流行がおこっていった。パッチワークキルトは，アップリケ同様専門的な技能をあまり必要とせず，多くの女性たちにアメリカへの憧れとともに受け容れられていく。DIYの自然回帰は，トラディショナルなアメリカの暮らしという文脈に置き換えられ，そこでの手作りは保守的な性別役割分業に立ち戻っていった。

2-3　手作り生活の抒情性と内藤三重子

『私の部屋』では鎌田豊成の妻，内藤三重子がカリスマ的な人気を誇り，生活の知恵にまつわる様々なエッセイを寄稿している。初期にはアメリカの対抗文化の影響を受けた手作り観を語っていたが，次第に女性の社会進出よりも家庭で手間ひまのかかる手作りを推奨するようになり，それがカントリースタイルというアメリカ文化の中で，新しい文化として読者に支持されていくことになった。

2-4　生産労働からの疎外を乗り越えて

誌面からは，以前のジェンダーに戻っていく一方で，女性たちが自己実現のため自らの趣味の店を持ち，生産労働に加わろうとする新たな動向も見られた。

おわりに

女性の手作りは，伝統的な針仕事の延長のみならず，男女の領域を超えたDIYカルチャーの影響を受け，多様化していった。しかし当時の女性が置かれた状況を反映し，再び女性領域に戻っていく。こうしたジェンダーの境界を行き交う手作りとその意味については，今日のハンドメイドブームなども含め，今後明らかにすべき課題は多く残されているといえる。